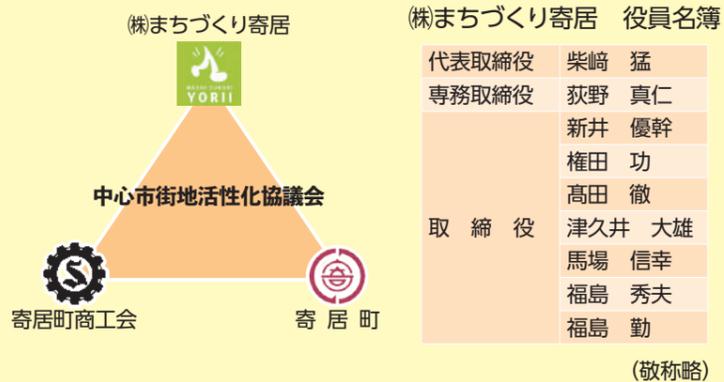


—(株)まちづくり寄居と中心市街地活性化—

中心市街地活性化事業で鍵を握るのは、まちづくり会社の活動です。中心市街地を魅力的な空間にするためには、ハード、ソフトの両面から事業を進める必要があります。

まちづくり会社は、地域密着型のディベロッパーとして、公益性と企業性を併せ持ち、行政や民間企業だけでは難しい開発等に取り組んでいます。

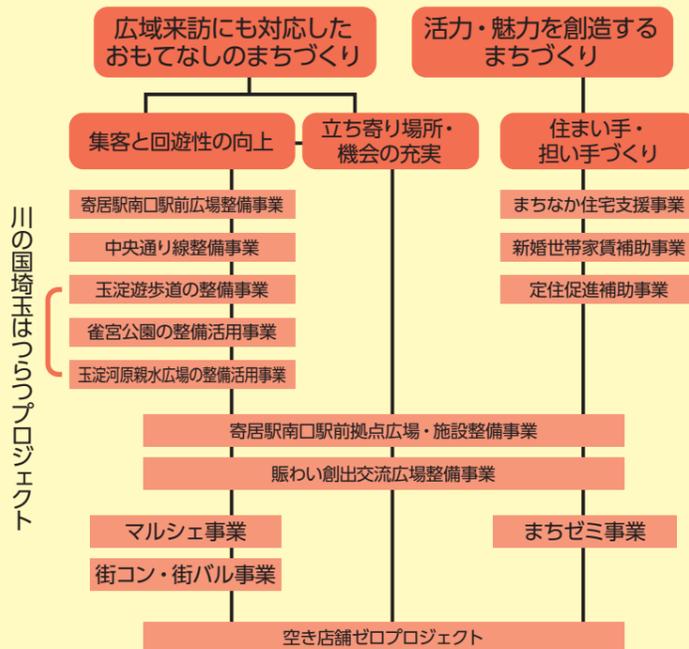
—組織図—



—実施事業体系図—

中心市街地活性化基本計画に位置付けられている主な事業は下記のとおりです。この計画に基づき、各種事業を効果的に実施しています。

歩きたくなる・歩いてお得なまち



寄居駅南口駅前広場整備工事着手

半世紀にもわたる懸案事項であった寄居駅南口の整備が本格的に始まりました。

図 中心市街地活性化推進室(☎581・2121内線451)

官民連携によるまちづくり
 —まちづくり会社の役割—

株式会社まちづくり寄居は、町をはじめ、商工会、金融機関、民間会社からの出資を受ける法定のまちづくり会社です。自治体が中心市街地活性化基本計画の策定および内閣府の認定を受ける際には、必ず、中心市街地活性化協議会と共にまちづくり会社等の設立が義務付けられています。これは、行政だけではなく、民間の力を最大限に活用し、官民一体となりまちづくりを進めていくためです。まちづくり会社は、中心市街地活性化事業を進めるうえで、欠かすことのできない中心的な存在として位置付けられています。

中心市街地の活性化

寄居駅南の中心市街地は、かつての秩父往還の街道筋にあり、江戸時代から物資の集散地として栄え、明治以降は、秩父鉄道、東武東上線、JR八高線の鉄道3線が乗り入れる交通の要衝として発展してきました。昭和初期には、中心市街地の南側に位置する玉淀周辺は、その風光明媚な景観から、多くの文豪や芸術家に愛され、別邸等が建ち、文化活動の拠点となりました。現在でも風情のある景観は当時のままで、多くの歌碑が残されていることから、かつての賑わいをうかがい知ることができます。

しかしながら、市街地の人口は、昭和40年代から一貫して減少し、平成29年現在で、当時の約50パーセントとなり、小売業の店舗数も減少し、中心市街地の空洞化が顕著となっています。

このような状況を打破するため、町では、株式会社まちづくり寄居、商工会と共に、30年度から中心市街地活性化事業に取り組み、令和4年度までの5年間で「賑わいの再生」に向け、さまざまな事業を展開しています。

半世紀にわたる懸案に着手

市街地を整備する構想は古くからありましたが、具体的な手法が定まらず、約半世紀の時が流れました。平成29年度に「寄居町中心市街地活性化基本計画」を策定し、内閣府の認定を受け、30年度から寄居駅南口を中心とした市街地の整備に向け、さまざまな準備や関連事業を実施してきました。

そして、ついに今年10月「寄居駅南口駅前広場整備工事」に着手し、本格的に市街地の整備が始まりました。来年度以降は、中央通り線の整備等を行う予定で、市街地の賑わいの創出のため、ハード、ソフトの両面でさまざまな事業を展開していきます。